

・今回のプロジェクトでは、非常に多くのことを学び、貴重な体験をさせてもらえた。事前学習で触れた情報の何倍・何十倍もの知識を持って帰れたと思う。現地でフィールドワークの重要性を再確認した。

今回のプロジェクトでとりわけ一番印象に残っているのは、カンボジア側の機関を訪問した際の熱意・積極性である。プレアヴィヒア遺跡でのNAPV、アンコール遺跡でのAPSARAでは私たちの些細な疑問に答えてくださった一方で、私たちからの遺跡に対する意見を真摯に受け止めてくれたことである。専門家だけではなく、私たちの様な一般の学生からの意見も活用しようとする姿勢・柔軟性を見習うべき点である。ぜひ、雨季のカンボジアにも足を運び、差異を感じたい。他にも、S21（トゥールスレン）では、理性を失った人間の残虐性を目の当たりにした。一方で、ただ悲観的な歴史を理解することだけにとどまらず、負の遺産として保存されているS21の意義やその在り方についても考えるきっかけになった。プノンペン国立博物館では、カンボジア国内の出土品が主に飾られており、それまでの学びを総括する場として流れを把握するのに有効であった。造形の些細な変化や滞在の数日で覚えた神様を見つけたときは、カンボジア滞在で得た知識の蓄積を感じることに繋がった。私自身入学と同時にコロナ禍に入って最初の2年は個人ワークが多く、今回の授業のように持ち寄った知識を共有、議論し結論を出す様な機会も少なかった。故に、授業当初はみんなで判断を下すことにも時間をかけたと思う。しかし、この様な体験を卒業する前に学べたのは幸運なことである。特に、今回のプロジェクト全体を通して、対立する意見や異なる分野を一つのプロジェクトの中で調整する能力というは、社会の些細な場面でも必要になってくる。プロジェクトで学んだことを忘れずに、自分の研究の糧にしていきたい。最後に、今回のプロジェクトに関わってくださった関係者の皆様にお礼申し上げます。特に、授業内での熱心なご指導に留まらず、訪問先との交渉・調整において岡橋先生には多大なるご尽力を賜り、感謝申し上げます。今回のようなさまざまなステークホルダーと実際に意見を取り交わせたのは、一重に岡橋先生のおかげです。大変貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。また、ケガが完治していない中で今回のフィールドワークに参加してくださった上石先生にも感謝申し上げます。時には先生として、時にはカメラマンとして、時にはジャヤーヴァルマンX世として常に背後から優しく見守ってくださったおかげで私たちも緊張せずさまざまなことに挑めました。ありがとうございました。

・今回の旅は私が一生涯忘れられないものになりました。思い返せば、3年の2月末に予定されたこの旅は、日程的な就活の不安という余念を与えるものでした。しかし、ある人に相談したところ、「行きたいんでしょ?」と言われ、「行きたい!」と即答した時の意欲

的な私でさえ、この旅の終着点を決して予想できませんでした。この5日間は21年の人生の中で最も熱く充実していたと思うのです。日中39度近くまで上がる乾燥した気候の中、トクトクに乗ってカンボジアの風を切っていた時、私ははじめて「生きている」と感じました。そして、それがどれほど素晴らしいことかと一瞬詩人のような感覚に陥りました。全てが新鮮でした。今までにも海外に渡航する経験はありましたが、人の温かみに触れる機会はこれ程なかったように思います。カンボジアの環境と人との出会いが、殻に籠った自分を新しい世界に引き込んでくれた気がしています。それは、感覚的なことだけではなく、知識的な幅の広がりについてもです。私にとって遺跡は身近ではありませんでした。関心がなかった=知らないだけ。私は、様々な関心を持ったメンバーがいてくれたおかげで、新しい関心の扉を開けることができました。海外渡航はコロナ禍明け初、スケジュールの立て方や目的意識を定めること、準備が如何に重要か痛感しました。そして、スケジュール面で私は役立たずで、先生の素晴らしいご人脈と私たちの関心を汲み取っていただいた上での行程かのおかげで、かけがえのない学びを得ることができました。学びの面では、これこそ多角的な視点というように、おなじ問題点を複数の視点から見ることで面白いほどに理解が深まることを体感しました。何より、食事の場でも濃厚な話ができ、持論を展開させた時には鋭い視点で新しい疑問の切り口を開いてくれる大人に出会えたことは私にとって喜ばしいことでした。素晴らしい経験を糧に、常に新鮮な感覚を忘れずに過ごすことを大切に過ごしてまいります。

・私にとって今回の研修は初の東南アジアということもあり慣れないことが多々あるのではないかと心配でしたが、いざカンボジアに行ってみると自分自身の適応能力に驚きました。今回の研修で印象的だったのは上智大学の三輪先生のお話であった内戦直後のカンボジア人の顔つきや表情は全く今と異なるとのことでした。そのような状況下の中で日本はODAなどと言った援助を行い、一見すると目に見える形がない為地味で実りの無いように見えてしまうが地域に根付く残る開発援助を行っていたということを実際にカンボジアへ行き、知れることができ日本人としてとても誇り高いなと思いました。また、内戦直後の現地の方はアンコールワットへ行ったことのない人が多いとのことでした。理由として家族が多いと燃料代が勿体なかったり、行く時間や労力がなかったりと文化財に目を向ける余裕がないことが挙げられます。日本では修学旅行として歴史的建造物の多い京都や奈良へ行く機会がありますが、カンボジアには修学旅行という制度がないため地方から訪れるのは現在でもなかなか難しい部分があるとのことでした。今後は、修学旅行と言った制度を整え、カンボジア地域全体の子供たちが一度足を運び入れることが出来れば良いなと感じました。加えてカンボジアは内戦や戦争といった常に搾取され厳しい時代を乗り越え

て今のカンボジアが形成されましたが、10年15年もすれば今見ているカンボジアの状況でなく、また新たに発展している様子を考えるとまた訪れたいと感じました。最後に、5日間の研修を通して様々な専門家の方と出会い、私たちの質問を真剣に答えてくださり、また温かく迎えてくれたカンボジアの皆さんや日本の方々に感謝の気持ちで一杯でした。また引率の先生方や研修と一緒にいった先輩方や同期の皆と楽しく学び過ごすことができるとても楽しかったです。このご縁を今後とも是非続けて行きたいと思いました！

・今回のカンボジアで見たことや触れたこと、人と出会ったことは私の今後の基盤になっていくのだろう。コロナ禍が明けて久しぶりの海外で初めてのアジアの国で、衛生面のことと治安のことを警戒していたが想像を上回るカンボジアの発展ぶりを知ることとなった。コロナ禍に道路を整備したり2025年までにJICAと協力してシエムリアップのスマートシティ化を試みているようで今後10年だけでもカンボジアは世界に開けたさらに魅力的な観光国家になるのではないかと期待できる。一方でしばらくは外国からの支援を頼りにしているのだということが伺えた。特に文化遺産の修復現場は国によって方針が異なるため現地の人々が持続的に修復保全していくために引き継ぎしていくことができるのか疑問が残った。

私がこの研修で特に見られたよかったと思っていることは日本の上智大学、早稲田大学が人材育成事業に関わっている様子だ。上智大学の石澤良昭先生の「現地の人材を育成する」という理念について事前に調べていたので先生がカンボジアで広く尊敬され今日も活動が続いていること、これにより日本とカンボジアのつながりが深くあることがよく分かった。日本側にもこの密接な関係を知らせることができたら良いと思う。資金面や機関による方針の違いなど問題はあるようだったが、問いを明らかにしアンコールと生きる道をカンボジアの人々と模索し続けるのだろう。その仕事は文化遺産との対話であると同時に土地の文脈を深く理解していくものだった。文化遺産に関わる現場で働く人にますます憧れた。そしてここで出会った先生方は進路を考える上で指標になるかもしれないと思う。アンコール遺跡には多くの国、人が関わり続けている。そしてアンコールワットは修復、人が出入りしやすく保全されており世界遺産として完成されていると感じた。これから文化遺産保護の見本としてカンボジアは見られていくのかもしれない。カンボジアで遺産を取り巻く空気感、人々の仕事や態度を見られたことは書籍やネットで調べただけでは得られない情報だった。現地を歩き回ったことは世界遺産教育で言うところの「現場の風を感じる」体験で、回廊を歩いている時間は自分がここにいることについて、遺跡が現存していて祈っている人や守りたいと思っている人がいることについてやカンボジアの人々がアンコール遺跡と共に生きていることについてなど思いを巡らせていた。特にアンコールワ

ットはそれ自体に宇宙を落とし込んでような空間だった。王の権力を示し宗教的な意味を持つ空間というだけではなく壁面の細かい部分まで美術的にこだわっていたことが印象的であり、当時の職人たちのこだわりや個性、息遣いまでも感じるようだった。このような人の気配が感じられることはアンコール遺跡の特徴であるような気がする。大義のためという以上に人の誇りが感じられるものだったからだと思う。人為的自然的要因により目の前で遺跡の姿が変化してしまう、風化してしまう恐怖も感じられた。壮麗で全ての人々を受け入れるような空間で、ジャワバルマン7世が国民が信仰した全ての神を祀ったというだけある。まさに世界遺産だといえる風格だった。ここで観察できたことは自分でまた詳細にまとめるつもりだ。文化遺産を通して過去の歴史に触れられたと同時に人々の働きにカンボジアの未来を感じた。ここを訪れて私が考えたことや学んだことは多くの人によって考え尽くされ示されたことかもしれない。しかしそうと決めつけず自らで探求していくことが大切なのではないかと考えている。カンボジアで様々な人と出会い学び、自分も彼らと共に未来を探求していく1人なのかもしれないと思った。これから心を決めて進んでいく気持ちが固まった旅であった。先生方の言動から学ばせていただいたこともたくさんありました。

・私はカンボジアへ今回初めて行ったが、想像以上に道が整備されていたり、トイレにトイレットペーパーがおかれていたりなど、インフラの面で発展した様子がうかがえた。そしてその背景には、新型コロナウイルスによる影響で観光客が減少している間に、軍などによって早く整備されていたことがわかった。この約5日間のカンボジアでの研修を通して、遺跡を体感したり、カンボジアの文化に触れたりすることができただけでなく、地元の遺跡を管轄する行政側の話やJICAの話、アンコール遺跡に関わる日本の大学の活動や、日本とカンボジアの外交関係について学びを深めることができた。初めてアンコールワットを見たとき、非常に綺麗で威厳のある姿にとっても圧倒された。そして細かく見ると、参道が真ん中を境に、表面が削られたまっすぐなフランスによるものと、表面の痕跡を残すことを重視した日本によるものとで少し橋の様子が異なっていることがよく分かった。アンコールワットには、細かな彫刻があり、神話などが描かれていた。中央堂の頂上からの景色は非常に綺麗であった。アンコール遺跡を見学する際には、デジタルでのQRコードを提示したり、遺跡周辺には計画的に設置された植林なども見え、遺跡だけではなく遺跡を取り囲む自然の保護を通して、地盤を固めていることを知った。日本はICCというアンコール遺跡をめぐる会議の共同議長国の1つで、この会議を通してAPSARAが設置されたことを知った。そして日本が、遺跡の保護や修繕に関わるだけではなく、人材養成にも携わっていることが印象的であった。カンボジアでは、ポル・ポト政権下による知識

人の大量虐殺があったが、その影響は非常に大きく、今日においても人材という点から見て課題が残っているように感じられた。上智大学はカンボジア人によってカンボジアのものが守られるように支援することを重視しているが、この考えは非常に重要で、金銭的かつ技術的支援を多く受ける傾向にあるカンボジアが自立していくことが求められているように感じた。JICAでは、自然を尊重しながら住民と観光客にとって持続的で魅力的なスマートシティの構築を目指し、現在は情報収集後の実行段階にあるが、主要課題に対してこれから忍耐強く解決していく必要性を感じられた。他にも、プレアヴィヒアと国境による遺跡の主権問題の解決に向けたプロセスについて学んだり、美味しいカンボジア料理を堪能したりした。全体を通して、カンボジアでは日本とは異なってアンコール遺跡が国民のアイデンティティに深く根ざしていること、カンボジアが自立できるように日本が支援していくことの必要性を感じられた。カンボジアの人々は温かく、多くの観光客で賑わっていた。しかしながらアンコール遺跡だけではなく、農業や経済の面でもまだまだ発展の兆しを感じた。ここから今後続くカンボジアの発展も注視しながら、再度カンボジアを訪れてみたいと思う。